海外レポ

台灣区冷凍蔬果工業同業公会

「'25年日台農産物安全懇談会」開催

台湾産枝豆の需要拡大・日台の絆深める

【台湾高雄市】台湾の冷凍野菜生産者団体、台灣区冷凍蔬果工業同業公会（魏 東啓理事長＝建一強冷凍食品股份有限公司）は5日、高雄市内のホテルで「2025年日台冷凍農産物生産販売安全懇談会」を開催した。日本側は大手冷凍食品メーカーを中心に組織する輸入冷凍野菜品質安全協議会（凍菜協・中井清典会長＝ニッスイ執行役員）のメンバーら関係者25名が出席。台湾側は、日本の農水省にあたる農業部や公会メンバーら74名が出席。台湾産枝豆の需要拡大と日台双方の絆を深める有意義な会合となった。

（三浦正幹）

冒頭、魏 東啓理事長があいさつ。「台湾の枝豆産業は50年以上の歴史がある。日本は一番重要な輸出先であり続けている。日台がさらに深く協力してお互いがさらに成長できることを願っている。畑の栽培から加工まで管理するトレーサビリティ体制を確立し、日本の消費者へ安全安心で高品質でおいしい枝豆を安定供給し、信頼と暖かい支持をいただいている。最近は地球温暖化による気候変動や生産コストの上昇など様々な難しい問題に直面しているが、関係者の知恵と努力があれば必ず乗り越えられると信じている。それが生産者と消費者の大きな幸せにつながる」と語った。

台湾農業部 蕭 柊瓊司長

魏理事長

中井会長

台湾経済部 盧 惠珠主任

続いて、農業部国際事務司の蕭 柊瓊司長があいさつ。「台湾の冷凍野菜産業において枝豆はスター選手。過去5年間の平均輸出は年間平均で3万3000トン以上。特に日本向けは70～80％を占める。これは台湾産の品質が優れていることだけでなく。日本との長年の深い信頼で結ばれた貿易関係の証。しかしながら、気候変動や米国関税問題などの影響で台湾枝豆の日本市場でのシェアは少し縮小した。環境が変化する中で台湾枝豆産業は生産量において大きな課題に直面。改良場をはじめ、国際貿易商、パッカーが一体となりワンチームで枝豆づくりに取り組んでいる。輸出向けの枝豆のトレーサビリティシステムを推進、安全安心の管理を行っている。気候変動に対しては、新しい品種の開発に取り組み、収量の多い枝豆づくりを進めている。農業部の動植物貿易検疫所では様々な検査を実施して安全管理に努力している。残留農薬の検査も行っている。長きにわたり台湾の冷凍枝豆製品をサポートいただいている日本の企業に感謝する」。

また、経済部国際貿易署高雄事務処の盧 惠珠主任が来賓あいさつ。「懇談会は今年で31回を迎えた。日本と台湾の緊密な関係を象徴するもの。日台の枝豆貿易は55年の歴史がある。日本は主要な輸出先であり、昨年の対日輸出額は6・47億米ドルに達した。うち冷凍枝豆はトップを占める。台湾は日本市場を重要視しており、冷凍農産品の生産販売の安全性の確保に努めている。日本市場における台湾産の優れた冷凍農産品の販売強化、消費者のさらなる関心を獲得するため経済部国際貿易所は毎年、農業部と公会、貿易協会と連携して日本で開催される展示会等に参加している。こうした取り組みを通じて台湾産の冷凍野菜に対する理解を深めていただき、より多くの日本の消費者に届けていきたい」と語った。

日本側は、中井清典会長があいさつ。「地球温暖化は深刻な影響を与えている。台湾では7月の台風により南部で大きな被害があり、秋の18号でも被害が出た。農産物への影響を心配している。懇談会の大切な目的のひとつは、枝豆の生産と収穫の喜びを日台双方が共感すること。明日（6日）の収穫祭で皆さまと祝いたい。今回は日本の消費者団体関係者も参加している。台湾産の安全とおいしさの秘密を体験していただき日本の消費者へ広く伝えていただきたい。また、農業用ドローンの農薬ドリフト汚染の対策について日台双方で課題を議論したい。この課題が大きな問題になる前にリスクを小さくしたい。これからも日本の消費者へ安心安全な枝豆を提供できるよう一緒に頑張っていきましょう」と呼びかけた。

台湾表彰式 劉氏（左）、蔡氏（右）

引き続き、台湾産農産物の販売に貢献した企業を表彰。農業部国際事務司の蕭 柊瓊司長が感謝状を授与した。また、長年にわたり台湾の枝豆産業の発展を支えてきた功労者で、公会の元

理事長である劉 貴坪永昇冷凍食品工業股份有限公司董事長と、同前理事長の蔡敬虔大明食品工業股份有限公司董事長に特別貢献賞が贈られた。

マルハニチロの奥田修一朗農産事業部部長は「台湾の枝豆生産者様、パッカー様のたゆまぬ努力で高品質な枝豆を安定的に日本に供給していただいたおかげ。この表彰を励みに、さらに台湾産枝豆の安心安全、安定供給、おいしさを日本国内に広く発信し、さらなる需要拡大に努めていく」と謝辞を述べた。

劉氏は「日本の農業関連の皆さまのおかげ。台湾の農業部国際司、経済部国際貿易所などの協力、指導で台湾産枝豆が海外で成果を上げている。生産農家、販売の皆さまの協力も大きい。当社の枝豆生産は昨年1トンに達し、台湾市場の中で大きく成長した。亜細亜食品にも感謝、枝豆の生産、収穫の自動化、機械化の進化で成果を上げることができた。農業部が枝豆栽培土地を確保してくれたことで収量が増えた。感謝でいっぱい」と感無量の様子で語った。

枝豆試食会

蔡氏は「日本の皆さまの協力、台湾農業部のサポート、生産者の努力により品質向上に注力していただいたおかげ。農業生産者の一員として台湾農業の発展に携わってきたことに感謝している。今後も様々な協力と交流を通じて日台の絆が深まることお祈りする」と語った。

その後、講演会を行い、全国消費者団体連絡会の郷野智砂子事務局長が「日本の消費者の購買傾向について」、次いでFood Communication Compassの森田満樹代表が「消費者に身近な輸入食品の安全確保について」と題してそれぞれ説明した。

講演会の小休止では、枝豆、インゲン、レモンといった台湾農産品の試食会を行った。続いて、台湾大学農学院の盧 虎生名誉教授が「台湾の気候変動及びカーボンニュートラルの潮流における農業（作物）生産の課題とチャンス」を演題に講演。中井清典会長が「農業用のドローンのドリフト防止対策」について説明した後、日台双方でディスカッション。台湾農場での取り組みの現状について意見交換した。懇談会閉会あいさつは、ノースイの森瀬公一社長。その後、懇親会を行い、亜細亜食品股份有限公司の林 志鴻社長が開会あいさつ。ニチレイフーズの上野直之執行役員品質保証部長が中締めした。

〈台湾農業部台南区農業改良場を訪問〉

台南区農業改良場

凍菜協一行は、「日台冷凍農産物生産販売安全懇談会」に先立ち、日本の農林水産省にあたる農業部台南区農業改良場（台南市）を訪問。黄 惠琳秘書・研究員が出迎え、沿革や業務概要、研究成果などを説明してくれた。

1902年台南県農民協会により試験農場として設立、23年台南県農業試験場となり、58年台南区農業改良場に改称、2023年農業委員会から農業部に昇格した。農作物の品種改良、栽培技術研究、植物保護試験、病害虫発生予測、土壌改良、農業機械、自動化など農業技術コンサルティング、農家や消費者向けサービスを行っている。

地球温暖化による気候変動で暑さに強い品種改良に注力。稲作、コーンなどの穀物、枝豆、マンゴー、パイン、ドラゴンフルーツ、メロン、アスパラガス、トマトなどの果樹野菜のほか、胡蝶蘭など花卉にいたるまで幅広く研究している。

農場説明 劉 貴添執行長（中央）

農業機械では、自動マルチング、ブロッコリーカッター、皮むき、大型ハーベスター、電動高所作業、自走式蒸気消毒など効率化に向けた研究開発を推進。若い農業者や技術労働者向けの研修や訓練など人材育成にも注力している。

〈台湾産冷凍枝豆、秋作の収穫本番〉

台湾産冷凍枝豆は、秋作の収穫が本番を迎えている。栽培は順調で生産量は平年並みを見込んでいる。台湾の冷凍野菜生産者団体、台湾区冷凍蔬果工業同業公会によれば、昨年の秋は台風被害により大減産し、今年の春作も減産したが、秋作は天候に恵まれ作柄も良好。「生産量は昨年を大きく上回る見込みで、平年並みに回復できると期待している」（劉 貴添永昇冷凍食品工業股份有限公司執行長）と語った。

これに関連し、台湾南部の屏東県にある大規模農場で6日、枝豆収穫祭が開催され、地元住民や遠方から多数が来場した。台湾国内販売のPR活動を目的に2014年から開催しているもので、地元メディアによると、今回の来場者は5万人規模に膨らんだ。好天に恵まれた当日、日本から参加した輸入冷凍野菜品質安全協議会（凍菜協）のメンバーらが招かれ、熱烈に歓迎された。

開会の冒頭、公会の魏理事長があいさつ。「枝豆祭りは2014年から始まり今年で9回目。コロナ禍や台風で中止した年もあるが、今年は作柄も良好。枝豆4000パックのほか、枝豆おこわ、ポタージュなど加工品のプレゼントも取りそろえた。楽しんでほしい」と呼びかけた。

秋作の収穫本番

続いて、日本から参加した凍菜協の中井清典会長（ニッスイ執行役員）があいさつ。「台湾の枝豆は高品質でおいしい。これは台湾の皆さまの『枝豆愛』の賜物。日本の消費者に台湾産枝豆のおいしさ、品質の高さを伝えたい」とした。

秋作の収穫は1月10日頃まで続く見通し。

枝豆祭り